



Title	新語の史的研究
Author(s)	橋本, 行洋
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58534
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	橋本行洋
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 24109 号
学位授与年月日	平成 22 年 4 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	新語の史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 蜂矢 真郷 (副査) 教授 石井 正彦 准教授 岡島 昭浩

論文内容の要旨

本論文は、「新語」について、現在のものだけではなく、過去における特定の時点での新しい言語現象としてのものを含んで、国語史的に検討するものである。

第一篇「新語研究の構想—通時的研究の立場による—」、第二篇「新語意識と新語」、第三篇「語彙体系と新語」、第四篇「漢字・漢語と新語」からなり、主として第一篇にとり挙げた語についての別表 1「新聞記事における出現数一覧」、別表 2「国会会議録におけ

る出現数一覧」、および、「本研究のまとめ」、「引用・参照文献」「調査対象とした現行国語辞典」「用例検索に使用したデータベース」を付す（400字語換算約810枚）。

第二篇は、第一章「「気づかない～」という術語について」、第二章「「かつぜつ（滑舌・活舌）」—《気づかない新語》の典型例—」、第三章「「めせん（目線・視線）」—「視線」との関係を中心に—」、第四章「「食感」—研究者用語の一般化とその経緯—」、第五章「「かつぜつ」・「めせん」の出自について—映画・演劇用語の語源—」からなり、第三篇は、第一章「語彙史・語構成史上の「よるごはん」—食事語彙体系の変化に伴う新語の成立—」、第二章「「特化」の成立—体系意識による新語の生成—」、第三章「「わらかす」の成立から「わらける」の派生へ—動詞の語構成と新語—」、第四章「「ちらかす」と「ちらかる」—他対応関係をめぐる問題—」、第五章「「けがる／けがす」と「よごる／よごす」—位相差から意味差へ—」からなり、第四篇は、第一章「『太平記』諸本における「こはし」・「つよし」—語義変化と漢字表記—」、第二章「「凌」字訓の「こはし」—〈恐ろしい〉意の成立時期に関連して—」、第三章「「ぎごは」と「ぎごつなし」—和語と漢語の交錯（1）—」、第四章「「情ごは」・「強盛」と「強情」—和語と漢語の交錯（2）—」、第五章「「鬱陶」から「鬱胸」へ—書記言語における新語の成立—」からなる。

第一篇は、「新語」について、現在のものだけではなく、過去における特定の時点での新しい言語現象としてのものを含むことについて述べ、「通時的研究の立場」から研究する姿勢について述べる。

第二篇は、業界用語や研究者用語であったものが「気づかない」うちに一般語の中に入り込んでいるといった「《気づかない新語》」をとり挙げ、「滑舌（活舌）」・「目線（視線）」は映画・演劇業界用語であり、「食感」は食品学・調理学研究者用語であったものが一般語に入り込んだ過程を明らかにしている。

第三篇は、語彙体系の意識が新語を生成し安定させるものを取り挙げ、「あさごはん」「ひるごはん」に対する「よるごはん」の成立や、翻訳語彙における「分化」に対しての「特化」の成立や、「わらわかす」から変化した「わらかす」の成立と～カスと～ケルの対立から「わらける」が派生することや、「ちらかす」から「ちらける」ではなく「ちらかる」が派生することや、位相差のあった「けがる／けがす」と「よごる／よごす」が意味差を持つようになる変化の過程を明らかにし、そこに語彙体系に対する意識が関わることについて述べている。

第四篇は、『太平記』諸本の「強」字などの訓が「こはし」が「つよし」に変化して行くことや、「鬱陶」から「鬱胸」が生まれることのように、その変化が漢字表記を介するものや、「ぎごは」「ぎごつなし」や「情ごは」「強盛」「強情」のように、その生成に和語と漢語の交錯が関わるものについて述べ、その変化・生成の過程を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

「新語」の研究はこれまで現代語についてなされるのが普通であるが、本論文は、過去における特定の時点で新しい語形や新しい意味に用いられるものをも「新語」として扱う点に特色があり、過去の「新語」については無論のこと、現代の「新語」についてもその成立過程を通時的に明らかにしようとするところに新しさがあり、評価できるところである。また、「気づかれない」という観点は今後の研究に対する力を持っていると言えよう。

そして、現代の「新語」についての検討にあたっては、映画・演劇業界、食品学・調理学研究者や食品業界、児童語、経済学・経営学、生物学といった、それぞれの語において

個別的な分野の用語の用例を多く拾い検討の対象にしている、他方、「新語」に対する批判的意見も紹介しており、また、辞書についても版の差違を丁寧に見ていて、新聞記事や国会会議録にも目を通し、その努力は決して容易なものではないことが知られる。『広辞苑』に掲載されると、新聞等で多く用いられるようになるという調査結果もおもしろい。

過去の「新語」についての検討においても、中世・近世の用例がどちらかと言えば中心であるが、上代の文献や、訓点資料における用例も必要に応じて見ていて、検討対象の広さは注目されてよい。『太平記』諸本の訓の差の調査のようにこれまであまり見られない方法や、ワ格に二種のものをとる「壁塗り構文」のように文法的な観点からの検討もあり、検討方法の幅広さも注意されよう。

「目線」と「視線」との差違、「食感」と「触感」との差違、「特化」と「分化」との対比など、和語のものも含めて、体系的に、対比的に見ようという視点も、全体として効果的であると言ってよい。

研究史においても、「気づかない方言」との関係のように、これまで十分に知られていないことを明らかにしている。国語学とは異なる分野のものも含めて、多くの先行研究を見ていて、その努力も十分に認められる。

一方、形容詞と形容動詞との相互変化については、もう少し広く他の例を挙げて検討してほしいところである。チラカルは特殊であるとするだけでよいか、やや気になるところである。使用者の意識から全体を見るという視点は、過去の「新語」についてはわかりにくい面を持つので、全体のまとめ方がわかりにくくなるという問題もある。篇と章との関係などは別の方法もあるかと思われるが、これは今後の課題とするところであろうか。誤植の少なくない点は惜しまれる。

しかしながら、体系化が難しい語彙研究の中で、「新語」を通時的に研究する本論文は、新しいところが多く、全体として評価できるものである。

なお、2010年2月24日、本論文の審査を行い、最終試験を終えた。以上のものであるので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。